神子畑の銀の採掘は1,000年以上前に始まった。15世紀までに神子畑は明延と生野といっしょになり，その地方で最も生産高の高い鉱山の一つになっていた。その最も栄えた時期は1870年代から1890年代の明治時代初期(1868-1012)であった。1896年に鉱山は三菱会社に売却されたが，1907年までに銀と銅はほとんど掘り尽くされていた。1919年，三菱はその地を東アジア最大の精錬工場の一つに変えた。亜鉛，銅，錫を含む原鉱は列車で明延から山を通って運ばれたが，明延では新しい鉱脈が発見されていた。

神子畑精錬工場は険しい斜面に建てられた。鉱石は頂上まで運ばれ，そこで砕かれ水と混ぜ合わせスラリー(泥漿)が作られた。スラリーが坂を下って行くにつれ，それはさまざまな物理的，化学的な工程を経て分離された。丘の麓では廃水が取り除かれ，鉱物が残された。その廃水は濃縮装置として知られる巨大なセメントのじょうごに注がれた。廃水は濃縮され濃縮汚泥になった。工場は1987年に閉鎖し，2004年に部分的に取り壊され，コンクリートの土台と濃縮装置だけが残っている。